

2003年度（第5回）学生懸賞論文「女性学インスティテュート賞」

総 評

上 西 妙 子

2003年度「学生懸賞論文」には4点の応募があり、2点に対して優秀賞が授与されました。以下に、選考委員会で出された意見をご紹介します。応募された方々の熱意を本誌の読者と積極的に分かち合うために、むしろ批判的な態度でまとめをしたいと思います。

受付順位①の「父親に対する娘の嫌悪感についての研究」（岩崎かおりさん）は、優秀賞を得た論文です。すでに広く了解ずみのような「嫌悪される父親」問題ですから、読み手は、説得力ある分析を期待しました。しかし、思春期の自己認識と心の鬱屈、父親に対して抱く反発への考察は、論述の大部分を占めるデータ分析の技術的な叙述にすりかえられたという不満が残りました。統計処理は見事でしたが、それが質問項目の不備を補うことはできません。嫌悪感とは、ほどくことの難しい全体的に循環する感情なのです。

すなわち、嫌悪感という生理的感覚を女子高生において生むとされる要因の設定（要約参照）が妥当で十分か、ということへの疑問、また、嫌悪感と、その感情が「原因でもあれば結果ともなる」日常行動との関わりの方向付けが一方的であることへの疑問が出されました。思春期の娘であることも、父親であることも大変な仕事であり、また、そのことを考えるのも簡単ではないということでした。

②「医薬品・サプリメント・健康飲料のCMに見るジェンダー」（酒井博子さん）も優秀賞を得ました。時間をかけて自分で見ていったCMにおいて、分析・分類を記録していくプロセスが感じられる研究でした。

CMの分類事例の豊富さは大いに評価されましたが、分析が不十分で比較対照が弱いと指摘する意見もありました。すなわち、販売戦略とCMが提示する（虚）像との関わり、CMでの薬効の提示を負わされる男女とジェンダー的役割分担の相関、取り上げたCMの、他との比較における類型としての解説、これらが不備であるとの指摘です。さらには、導入部で触れられるマスメディアとジェンダーの関係への言及を、実際に展開するよう求める声もありました。

しかし、女性が等身大で描かれ癒しを順調に取りこんでいる一方、健康飲料の男たちが滑稽な「英雄気取りの気合い」をいれているという指摘など、皆が疲れていると自覚している、もしくは、もっと健康で元気でいたいと思っている世の中ですから、これらの男女の姿は、「おだてられ、叱咤激励されている」日々の私たちの姿なのだと、しみじみと考えさせられました。

③「保育士の性別による『隠れたカリキュラム』について」(山口すずかさん)は、前年度にも応募があったテーマを取り上げたものです。しかし前回に指摘された問題点は、やはりこの研究の本質的な難しさとしてあるようで、本年度の論文においても克服されてはいませんでした。

まず、観察対象の量的・質的な不足です。観察期間、時間幅の狭さと、事例数の少なさです。さらに、保育士、園児、保育園自体についての基本的なデータの不備も指摘されました。具体的な観察記述は読んで面白いものですが、それがいくつか集まったうえで、次のような納得以上の結論、すなわち、「男性保育士は活動的」で、「女性保育士は保護的」であるという結論へと飛んでしまうのでは、それが性差によるのか個人差によるのかもわからないままで物足りません。

また導入部で、この保育園は「ジェンダー・フリー」を目指しているとあるのですから、「そこでも隠れたカリキュラムが存在する」と単に結論づけるのでは、この研究に取り組んだ意図が途中で終わっていることになります。

④『『Hanako』における結婚観の変遷』(中山沙代さん)は、読者層を特定している雑誌をめぐる情報の授受において、読者の「私」はどう関わっているのかを考えるきっかけとしても興味のあるテーマです。しかし批判はまず、データ(特集記事の変遷など)の扱いが羅列にとどまり、全体の論述が印象論、または詠嘆にとどまっていることに向けられました。

つまり、バブル期に一世を風靡した女性雑誌「Hanako」が景気悪化のなかでどのように変化したのかを辿るこの論文の全体は、一つの断定の繰り返し、すなわち、「バブル期には、結婚せず浮き足立った女性」像が、そして「不景気には、結婚に回帰する女性」像が雑誌を占めたと繰り返すだけの印象を与えたのです。

以上、文句ばかりという印象をお持ちでしょうか。しかしそれは、私たちが考えさせられ、若い人たちから「これ以上を言ってごらん下さい」と迫られたと感じたからなのです。来年は、もっと多くの方々のご応募を待っています。

(女性学インスティテュート学生懸賞論文選考委員長)

〈学生懸賞論文「女性学インスティテュート賞」〉

本学学生(学部生・大学院生)及び前年度の本学卒業生・修了生が執筆した、女性学、ジェンダー・スタディーズに関連する領域の論文が賞の対象となる。最優秀賞論文(1編)には5万円の賞金及び賞状、優秀賞論文(2編)には各2万円の賞金及び賞状が授与され、最優秀賞論文については当インスティテュート発行の『女性学評論』(年1回:3月発行)に全文が掲載される。

2004年度(第6回)論文募集の締切は2004年7月26日。選考結果の発表及び表彰は2004年10月中旬の予定である。詳細は当インスティテュートまで。